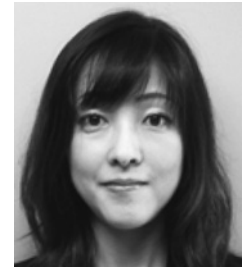


51st Interscience Conference on Antimicrobial Agents and Chemotherapy (ICAAC)

吉澤 定子

東邦大学医療センター大森病院感染管理部
総合診療・急病センター感染症科



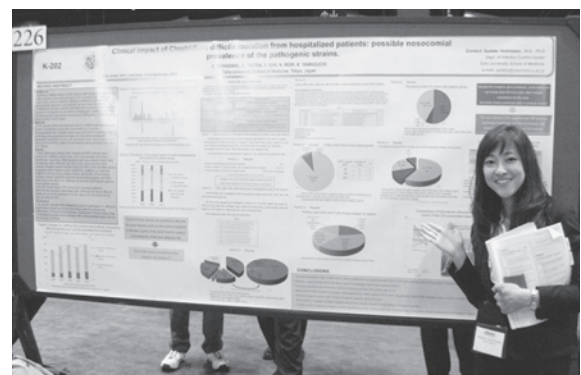
今回、51st Interscience Conference on Antimicrobial Agents and Chemotherapy (ICAAC) で発表する機会を得たので報告する。ICAAC は米国微生物学会 (American Society for Microbiology : ASM) が年1回主催する感染症の学会である。2011年はシカゴの McCormick Place で9月17日から20日まで開催された。主として感染症と抗菌薬に関連する学術集会で、100国以上もの国々から演題が登録され、参加者の半数以上がヨーロッパやアジアなどアメリカ以外の国から参加している。参加者は医師、臨床微生物学者、研究者、薬剤師などで、参加者数は毎年10000人を超える大規模な国際学会である。シンポジウム、インタラクティブセッション、Meet-the-Expertなどのセッション数は100を超え、2011年ICAACの一般口演、ポスターと合わせた発表演題数は1924であった。

今回の発表はポスターセッションで、「Clinical impact of *Clostridium difficile* isolation from hospitalized patients : possible nosocomial prevalence of the pathogenic strains」といったタイトルで発表した。微生物・感染症学講座と共同で研究した当院における *Clostridium difficile* の経年的分離状況と毒素産生遺伝子保有株の分布状況についての報告だが、本邦からの同様な報告はまだ少ないためか、さまざまな国の参加者から質問を受けた。種々のアイデア、意見をもらうことができたが、特に、海外の研究者がどのような点に興味を持っているか、どのようなことをさらに知りたいと思っているか、といったことがface to faceで実感できたことが有意義であった。

各セッションでは、日本でまだ発売されてない抗菌薬の臨床的な知見や新規開発抗菌薬の情報、さらに重要な疾患のレビューを学ぶことができ、また教科書で名前を見たこ



ポスター会場



筆者ポスター発表の様子

とがある先生の講演などもあり、感銘を受けた。

なお、アメリカの学会で感心するところは、朝早くから夜遅くまでプログラムが組まれている点である。今回の学

会も朝7時から夜7時までみっちり勉強できるようになっており、すべて参加すると頭が飽和するのではないかと思うが、魅力的なセッションが多く、それでも時間が足りないように思われた。早朝や夜遅い時間は海外では身の危険がないかと不安であるが、学会場から各ホテルまでシャトルバスが往来しているため安心であった。

以上、51st ICAAC 参加記を述べたが、海外の学会に参加して思うことは、国民性の違いかもしれないが演者が魅

力的なプレゼンテーションをすることが多く、参加者も非常に熱心なことである。会場が活気に包まれているため、自分自身の活力が補充されるような感覚を覚え、日本に帰ったらさらに頑張ろうと自分を奮起させることができた。短期間で世界的な最新の状況が把握できるのみならず、さまざまな情報交換が可能であり、活力も補充できたため、大変有意義な時間であった。今後も可能な限り継続的に参加したい学会である。